

Journal of Chubu University Education

No. 21
2021

【実践研究・実践報告】

2020年度春学期における未修外国語科目の遠隔教育

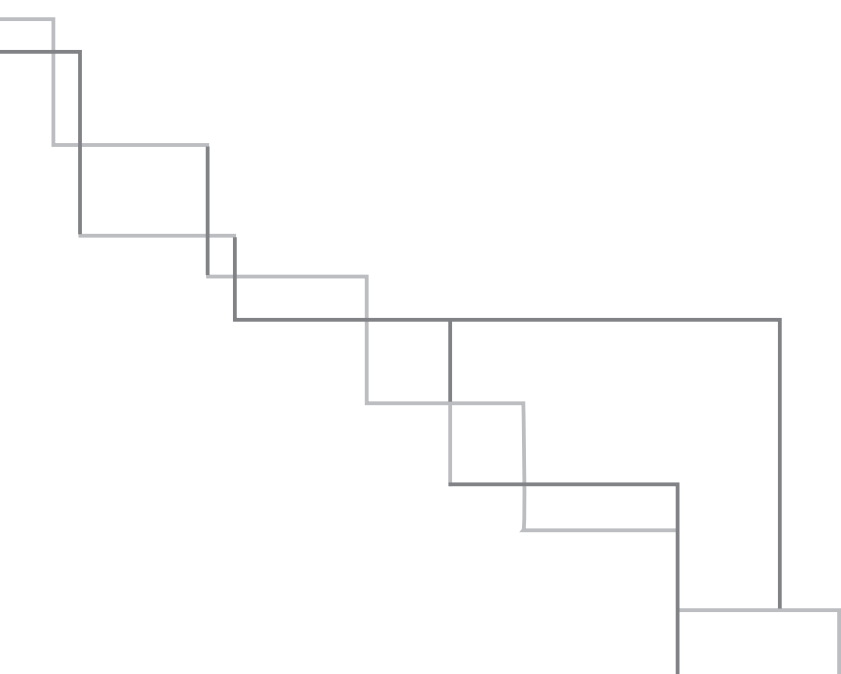
－中国語・韓国語を中心に－ 澁谷鎮明・和田知久

【Practical Reports】

Remote Education of Unlearned Foreign Language Subjects in the Spring Semester of 2020:

Focusing on Chinese and Korean

..... SHIBUYA Shizuaki and WADA Tomohisa



2020年度春学期における未修外国語科目の遠隔教育

ー中国語・韓国語を中心にー

澁谷 鎮明^{*1}・和田 知久^{*2}

要 旨

本稿は、2020年度春学期における本学の未修外国語科目について、中国語と韓国語科目を事例としながら、これら科目のコーディネータを務める筆者らがいかに対応し、遠隔教育を実施したのかについて記録し、考察を加えようとするものである。中国語については、新入生指定履修科目の見直しに伴い一部科目の履修時期を変更する対応を取るとともに、科目担当者間の情報共有と不安や疑問解消のために打合せ会を実施した。また、学部教育科目の中国語科目に関する科目担当者への聞き取りをもとに、クラス規模、遠隔授業での工夫や問題点をまとめている。一方韓国語は、科目コーディネータが科目担当者の要望や可能な授業方法を把握し、それに合わせて比較的容易な課題配信を中心に遠隔授業を行った。一部科目は韓国語を母語とする講師によるオンライン授業を交えた形態へと移行した。

キーワード

未修外国語、中国語、韓国語、外国語教育、遠隔教育

1 はじめに

本稿は、2020年度春学期における本学の未修外国語科目について、中国語と韓国語科目を事例としながら、これらの科目のコーディネータを務める筆者らがいかに対応し、遠隔教育を実施したのかについて記録し、考察を加えようとするものである。

2020年度春学期は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、日本のほとんどの大学において、否応なしに急遽遠隔教育を行わざるを得なくなった。もちろんそれ以前に遠隔教育の資源や経験を積んでいた大学や学部はあったであろうが、多くの場合様々な試行錯誤を行いながら、授業を成立させるよう努力することとなった。

本学の場合、3月末のオリエンテーションは実施したものの、4月1日の入学式を中止するとともに、開講日を5月7日に延期した。その上でごく一部の授業以外は遠隔授業で行われることとなった。

遠隔授業になったのは、本稿で取り扱う語学の授業も同様であり、4月中旬に急遽準備し授業に臨むこととなった。この際に筆者らは自分の講義する科目以外に非常勤講師の担当を含む中国語、韓国語科目のコーディネータを務めているため、授業内容の調整も行った。

本稿で扱う「未修外国語」は、多くの学生が大学で初めて学習する、一般的に日本の中学高校では教えない

外国語を指す。これら未修外国語の場合、おそらく遠隔教育を行うためには様々な障害があった上に、授業開始までの時間も限られていたため、かなりのハードケースであったと言って良いだろう。

そもそも外国語の授業はネイティブスピーカーを含む非常勤講師が担当するケースが多い。これは本学に限らず多くの大学でも同様の構造である。そのため2020年度春学期にコーディネータは短い時間で方針を決め、講義を担当する非常勤講師全員に連絡を取り、遠隔教育が行われるように手配を行うこととなり、かなりの調整が必要であったと言える。

さらには、急遽遠隔授業に移行しようとする場合、それ以外にも障害が存在する。例えば未修外国語ということで、本来学生が声を出す発音練習なども必要であり、このような作業をいかに確保するのかは問題である。また中国語と韓国語の場合は、漢字の簡体字や独自のハングル文字を用い、しかもデジタルの文字入力方法も独特であることから、学修管理システム(LMS)を用いた学習や課題提出が困難であるなどの問題がある。2020年度春学期には、個別の授業内容に加え、これらの点についても解決する必要が生じた。

このような、やや特殊な状況下での遠隔教育への対応を整理し記録しておくことは、今後の教育研究における資料として重要と考える。同時に、通常の状態では

*1 国際関係学部 国際学科 教授

*2 国際関係学部 国際学科 准教授

は気づかない、教育システムの問題や実情に気づく契機になるのではないかと考える。

なお本稿では、上述の問題点をどのように乗り越えたのかにも留意しながら、中国語については共著者の和田が担当し、韓国語については澁谷が執筆したのちに整理・考察を加えることとしたい。

2 2020年度春学期中国語科目における遠隔教育

2.1 国際学科の中国語カリキュラム

国際学科の学生にとっての「第1外国語」は英語であるが、「第2外国語」は他の学部と同様に、全学共通教育科目の外国語教育科目から中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ポルトガル語の選択が可能である。ただし、中国語については「第1.5次外国語」とでも呼ぶべきカリキュラムを備えていて、未修者を対象とした「中国語A」から、中国語検定や漢語水平考試の上位レベルの級を目指す「資格中国語」に至るまで、受講可能な科目数とレベルについて言えば、英語に次いで充実しており、国際学科の外国語教育の特徴の一つとなっている。

例年の履修オリエンテーションでは、中国語を準専門的に学びたい学生には「中国語A」を履修するよう指導している。また、「学科基礎科目」では、中国語の発音・表現・文法的な基礎知識を身につけることを目標とする一方で、「学科専門科目」は「アドバンスト中国語科目」として、中国語の発音や文法を基本的に理解している者が、さらに高度な中国語運用能力を学修することを目指している（表1）。

表1 国際学科において受講可能な中国語科目一覧

	学期	学科基礎科目・ 中国語科目	学科専門科目・ アドバンスト中国語科目	全学共通教育科目・ 外国語教育科目
1 年次	春	中国語 A		
	秋	中国語 B		中国語入門 I
2 年次	春	中国語 C	ビジネス中国語 A	中国語入門 II
	秋	中国語 D	ビジネス中国語 B	
3 年次	春		資格中国語 A	実践外国語 A
	秋		資格中国語 B	実践外国語 B

※「中国語C/D」「中国語入門I/II」「実践外国語A/B」は週1コマ。その他科目は週2コマ。「中国語A」履修者には、内容的に重複するため「中国語入門I/II」の履修は奨励していない。全学共通教育科目の本来の開講年次としては「中国語入門I/II」は1年次に、「実践外国語A/B」は2年次に設定されている。

2.2 2020年度春学期当初の状況とコーディネータの取った対応

筆者は2020年度には学科主任補佐と学部中国語科目のコーディネータを兼務していたため、双方の職掌分野の線引きが曖昧な部分があるが、2020年度春学期に出来た状況とそれへの対応としては、「新入生履修科目指定の再検討にともなう臨時のカリキュラム変更」

と「学部中国語科目担当非常勤講師の疑問や不安の解消」がある。

なお、筆者は「全学共通教育科目」のコーディネータではないため、本稿では「学部教育科目」の中国語科目に限っての言及となる。

2.2.1 新入生履修科目指定の再検討にともなう臨時のカリキュラム変更

4月15日の大学協議会での決定を経て、4月29日に実施が予定されていた新入生対象の学科オリエンテーションは対面では実施しないことが学部教授会（メール審議）にて伝達された。併せて、本来1年生春学期の履修科目は、学科による「指定科目」と「選択科目」から構成されているが、今学期に限り学科が全ての履修科目を指定して、教務支援課により一括登録することになった。例年なら国際関係学部では、1年生春学期の「選択科目」として「経済学概論」「中国語A」「パセオコンテンツA」を設けているのだが、上記の決定を受けて、学科主任と主任補佐を中心として検討を行い、全入生が遠隔方式で受講しても対応可能であると判断したことから、「経済学概論」を指定科目に加えることになった。

次の課題として、新入生を対象とした「中国語A」をいつ、どのように開講するかを検討しなければならなくなった。「一学期ずらして秋学期からの開講」と「一年間ずらして次年度春学期に開講」の2つの候補があったが、今後の学年進行も踏まえて検討した結果、「一年間ずらして次年度春学期に開講」することに決定した。その理由としては、中国語が未修外国語であるため、発音指導や基礎的な文法事項解説などといった学習内容は対面授業のほうがより丁寧に教授できること、一学期ずらすよりは臨時の大幅なクラス増を回避できること、コロナ禍が秋学期以降も継続する可能性があることなどが挙げられる。

ただし、「中国語A」にはごくまれに2年生以上の履修者もみられ、彼らが春学期に受講できないのはカリキュラム上適切ではないと判断したため、不開講とはしなかった。大学生活に慣れているはずの2年生以上で、少数の受講者であれば対応可能であると考えたからでもある。結果として、2020年度春学期の「中国語A」は不規則的な開講をすることになってしまった。

2.2.2 中国語科目担当者による打合せ会

4月14日付けの副学長（教育担当）名義の教務支援課からのメールによって、語学科目のすべての授業についてはクラスの大小にかかわらず原則として初回から遠隔授業とするとの通知があった。

遠隔授業には、メールなどと並んでLMS（学修管

理システム)の使用が必須となるが、非常勤講師の中にはこれまで本学のLMSを使用したことがないために不慣れであったり、遠隔授業実施全般に対して不安や疑問を抱えているように見受けられた。それらの共有と解消を目的として、4月23日に非常勤講師を含めた中国語科目担当者全員による打合せ会を対面形式で開催した。

2時間程度の打合せ会には、学部の中国語科目を担当する非常勤講師3名全員と「中国語A」を担当する専任教員2名が参加した。会では授業実施に必要な資料として、授業計画をより詳細に記載している冊子『2020年度中国語科目授業参考資料(改訂版)』と、教務支援課からすでにメールで送付されている遠隔授業実施に関する文書3点を改めて配付した。冒頭に上記資料に基づいて、2020年度春学期の授業実施に関する大学の方針と、新入生指定科目から「中国語A」を除外し、翌年度の新入生とともに受講させることを含めた学部の方針を改めて参加者に伝達した。それからそれぞれの教員が担当する「中国語A」「中国語C」「資格中国語A」の遠隔方式による授業方法について話し合うとともに、担当者が現時点で抱えている不安や疑問を積極的に聞き出すよう心がけた。そこで決定された授業方法の詳細については次項に譲る。

打合せ会を開催して確認できたことがいくつかあった。一つは、教務支援課からのメール連絡が必ずしも上手く機能しておらず、授業方法全般についての本学の方針をよく理解していない非常勤講師がいたことである。その理由として、非常勤講師は採用時に連絡用としてメールアドレスを登録しているが、登録から時間が経過してしまい、そのメールアドレスがすでに使用されなくなっていたようである。本来は非常勤講師本人が留意すべきことではあるが、コーディネータとしては、共有すべき情報の「圏外」に科目担当者がいるかも知れないことを常に想定すべきである。二つは、非常勤講師から他学の対応についても状況を聞き取ることができたが、本学の対応が特に混乱、遅滞している訳ではなかったことだ。コーディネータとしては新学期の授業実施体制が整わないことに焦燥を感じていたが、科目担当者の不安と疑問を丹念に洗い出して対応することが解決の近道だということを再認識した。三つは、想定されたこととはいえ、非常勤講師にとっては大学によって異なるLMSやWeb会議システムに対応することが、非常に大きな負荷となっていることが分かった。

2.3 授業科目ごとの対応

国際関係学部では中国語教育委員会(当時は仮称。2021年度より正式発足)を発足させ、2021年2月26日

に第1回会議を開催した。本項の記載は、一部表現を改めた部分もあるが、その際に専任教員4名に対して依頼した2020年度に各自が担当した中国語科目についてのアンケートへの回答に基づいている。また、「中国語C」についての記載があまりにも簡略であるのは、非常勤講師が単独で担当した科目であったのと、途中で退職してしまったため、詳細に聞き取る機会を失ったからである。

なお、遠隔授業方法の呼称については、講義動画等を用いて受講者が都合の良い時間に受講できる「オンデマンド型」と、固定された時間にZoomなどのWeb会議システムを用いて授業を行う「同時双方向型」とを用いる。以下に授業科目ごとに、クラス規模、遠隔授業での工夫や問題点を記す。

2.3.1 中国語A

本科目は中国語を準専門的に学びたい学生を対象とした「学科基礎科目」の「中国語科目」である。週2コマで2クラス開講。3名の担当者(非常勤講師2名と専任教員1名)がペアを組む。受講者は、クラス1が1名、クラス2が2名であった。

例年であれば、『中国語科目授業参考資料』に記載された進捗に基づき、授業方法は担当者の裁量に委ねていた。先述の4月23日に開催した打合せ会では、2020年度春学期は、非常勤講師の意向を確認した上で、教材を開講2クラスで統一的に使用することにし、そのために必要とされるGoogle Driveを用いた教材の共有方法や、授業期間中の連絡体制などについて決定した。本科目は、主にオンデマンド型、部分的に同時双方向型で実施した。担当者の専任教員が作成した授業資料に音声をつけた動画を、YouTubeにて限定公開して受講者に閲覧させた。課題についてはPDF化したものを配布し、印刷して課題に取り組むよう指示した。それに追加した独自の課題をCoursePower経由で公開して取り寄せた担当者もいた。また、Web会議システムGoogle Meetを用いて授業を行うことができた専任教員は、学生の発音指導も行うことができた。

授業開始直後には遠隔授業への導入で手一杯となり、(例年の対面授業であればできているはずの)PCや携帯端末で中国語を入力するために必要な設定について指導することができなかった。また、専任教員が授業資料の動画を日程的に余裕を持って作成することができず、担当者間での情報共有に齟齬をきたしてしまい、コーディネータが間に入り調整を行うことがあった。

2.3.2 中国語C

本科目は中国語を準専門的に学びたい学生を対象と

した「学科基礎科目」の「中国語科目」であり、2年次以上を対象とする。週1コマで1クラス開講し、1名の担当者（非常勤講師）が担当した。受講者は27名で、オンデマンド型で実施した。CoursePower経由で教科書に準拠した自作教材を公開し、課題を回収した。ビデオの配付は行わず、テキストベースの授業資料を配付していた。

2.3.3 ビジネス中国語A

本科目は「学科専門科目」の「アドバンスト中国語科目」であり、初級ビジネス会話の演習を中心とした授業と、相応レベルの文法と語彙を用いた作文を中心とした授業から構成され、授業内容と使用テキストは担当者で異なる。2年生以上を対象とし、週2コマで1クラス開講している。2名の担当者（いずれも専任教員）がペアを組む。受講者は15名であった。

いずれもWeb会議システムDing Talkを用いた同時双方向型で実施。Ding Talkのビデオ通話機能だけでなく、ファイル配布機能をCoursePowerと併用した。受講者の手許が見えるようビデオ画面をオンにさせるなどの工夫をして、オンラインでも試験を実施した。

授業終了後10分以内にメールにて課題を提出させたり、授業内容の理解が不足している学生に対して個別指導を行ったりと、同時双方向性を活かす工夫を行ったとのことである。しかしながら、それでも個別の発音指導が困難であったようだ。

2.3.4 資格中国語A

本科目は「学科専門科目」の「アドバンスト中国語科目」であり、検定試験対策としての問題演習を中心とした授業と、検定試験出題を意識したレベルの論説体の文章読解を中心とした授業から構成され、週2コマで1クラス開講している。2名の担当者（専任教員〔筆者〕と非常勤講師）がペアを組む。受講者は14名であった。

いずれもCoursePowerを用いたオンデマンド型で実施し、ビデオ配信は行っていない。PDFで配付する授業資料（図1）を順にたどって取り組めば、対面授業の段取りをなぞる形になるよう意識して作成した。文章読解では徹底的に辞書を引かせるよう工夫し、単に「知識の提供」で終わらぬよう「自分で調べて確認」できることを意図して教材を新規に作成した。また、教科書指定のアプリが提供されており、再生速度の変更が可能であるため、教科書の本文の音声聞かせて朗読（シャドウイング）練習をさせた。

ただし、聞き取り、発音のチェックと指導に苦労した。発音チェックは朗読したものをPCや携帯で録音し、ファイルをCoursePowerに提出させた。自主的

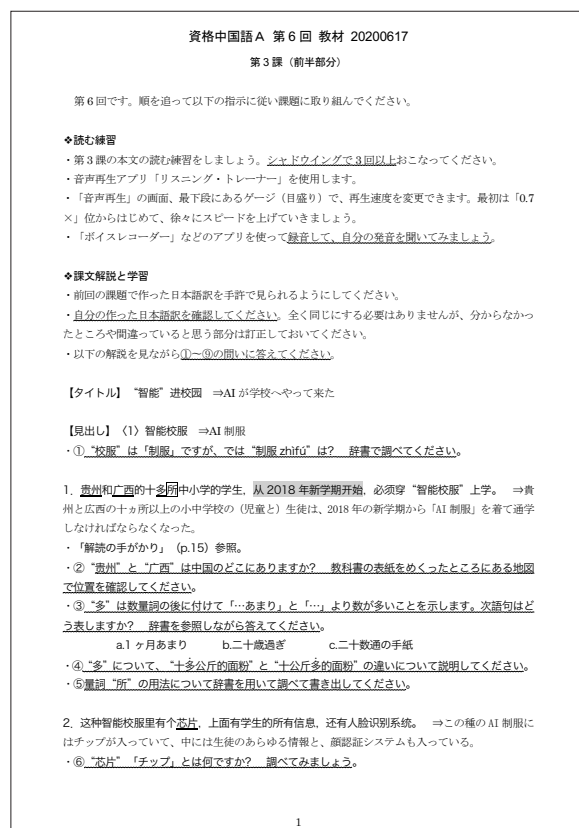


図1 資格中国語Aの教材例（第6回の一部）

な発話練習については断念せざるを得なかった。最終回のみはZoomで対面に準じた形式で行うことができた。

遠隔授業では、PCの操作やCoursePowerの使用など、授業参加にたどり着くまでのプロセスが複雑になってしまう。本科目では、授業指示から課題提出までの「授業本体」部分に関する指示を、書式なども含めてできるだけ分かり易くなるよう留意した。

この科目のみならず、上記の中国語科目全てに共通して問題であったのが、本学で標準となっているCoursePowerが中国語に対応していないことである。2020年度より急遽導入されたGoogle Suite for Educationでは多言語対応が可能であるため、幸い「資格中国語A」においては、各課の学習後に行う小テストを、同システムを用いて実施することができたが、受講者にとってみれば繁雑であったことと思われる。また、非常勤講師にとってもさらに別のシステムへの習熟が求められたことは苦痛であったようで、「中国語A」でのGoogle Drive導入を除いては、同システムを試みた者はいなかったようである。

2.4 小結

非常勤講師を含めた全ての教授者と受講者にとって、遠隔授業の実施は大きな負担であった。2020年度春学期のような状況下では、Web会議システムの有用さ

は理解していても、まずは授業を成立させることを最重要視すべきであると考え。教授者、受講者双方にとって、「敷居の低い」デジタル化から段階的に進めていくべきだが、2020年度春学期の中国語科目の実施についていえば、導入と基礎的な能力向上に費やされた。

各講師や授業ごとの対応としては、細かな問題点は残しつつも、全ての授業担当者の獅子奮迅の活躍により2020年度春学期の中国語科目はつつがなく実施されたと言える。この経験は、2021年度の遠隔授業のレベル向上に結びついている。

コーディネータには通常、学科執行部による授業編成に助言したり、授業進度や内容を記した冊子『中国語科目授業参考資料』を作成したり、学期開始前や終了間際の情報共有や成績評価関連の連絡を行ったりという役割がある。2020年度春学期のような「非常時」には、非常勤講師の疑問や不安を積極的に聞き取り解消する窓口としても、コーディネータの果たす役割が重要であることが改めて確認できた。

新入生の指定科目から「中国語A」を除外したことにより今後発生するイレギュラーなカリキュラム進行については、開講クラス数や履修指導の面で難しい対応が迫られている。2021年度春学期の「中国語A」の開講クラス数決定のために、2月に1年生（2020年度入学生）対象に履修希望のアンケート調査を行った。約60%の回答率であったが、履修の可能性が高い学生が約30%（24名）いることが判明した。実際に2021年度春学期に履修した2020年度入学生は24名であった。中国語の履修をもとから希望しない学生はアンケートにも回答していなかったと考えれば、信頼度の高いアンケート結果であったと言える。同様の履修動向希望調査は2022年度以降の開講クラス数を決める際にも役に立つのではないと思われる。少なくとも2023年度までは綱渡りのような科目運営が強いられることとなる。

3 2020年度春学期韓国語科目における遠隔教育

3.1 本学における韓国語教育

本学の正式な韓国語教育システムは、上に述べた中国語に比して圧倒的に規模が小さく、コーディネータの専任教員（澁谷）を含め3名で担当している。

科目としては、人間力創成総合教育センター管轄の語学EP（外国語）で全学共通教育科目として開講されている「韓国語入門Ⅰ・Ⅱ」（それぞれ週1回・1単位）がある。また国際関係学部専門科目として「韓国語Ⅰ・Ⅱ」（週2回・2単位）が開講されている。これ以外にも国際関係学部の一部の科目において、韓国語を用いて韓国社会や東アジアの国際関係を学ぶ内

容のゼミナールがある。

上記のうち、本稿では筆者のうち澁谷がコーディネータを行っている「韓国語入門Ⅰ・Ⅱ」、「韓国語Ⅰ・Ⅱ」について述べたい。前者は初心者から初中級クラスで、後者は初中級となる。また初心者クラスである韓国語入門Ⅰのみ一学期に3クラス開講され、比較的受講生も多く、人数制限の40名を超えて抽選になるケースも見られる。

韓国語は多くの学生にとって未修外国語であるが、ゼロから始めた場合、たいていの場合、独特のハングル文字の読み書きから学習が始められる。日本語のひらがな、カタカナもそうであるが、韓国語も文字そのものから学ぶ必要がある言語である。多くの場合ここが韓国語学習の最初で最大のハードルである。反面日本語と韓国語は文法構造が非常に近い上、漢字起源の語が多いという類似性もある。その後が比較的容易な分、韓国語教育においてハングル文字の読み書きの学習は非常に重要であると言えるだろう（図2）。

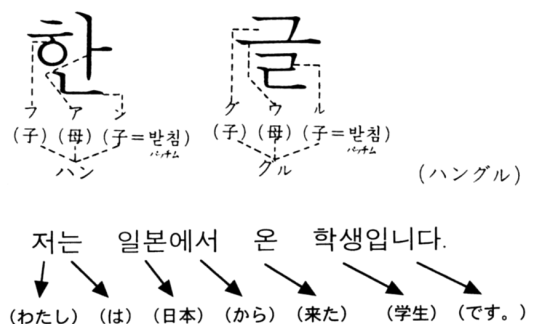


図2 ハングル文字（上）と韓国語の構造（下）
（上：『10日間のハングル』1984、下：筆者作成）

3.2 2020年度春学期の開始前の状況と問題点

コロナ感染拡大のため、2020年度春学期の韓国語科目は全て遠隔授業となった。授業開始が5月の連休明けとなったため、4月中にそもそも韓国語の授業で遠隔教育が可能なのかについて検討した。

まず、問題になったのは、コーディネータの澁谷、非常勤教員2名とも、それまで対面授業しか行っておらず、遠隔教育の経験がほぼ無いということであった。特に非常勤講師に遠隔授業をお願いする立場の筆者に遠隔授業の経験がなかったことは、第一に乗り越えなければならない問題と思われた。

また一方、国際関係学部専門科目である韓国語Ⅰ・Ⅱの担当者で、韓国語の母語話者である非常勤講師A氏は、対面授業についてはベテランであり極めて高い能力を持っているものの、メールも含めコンピュータを日常的にほとんど使用していないことが判明した。なお全学共通科目の韓国語入門Ⅰ・Ⅱを担当している

非常勤講師 B 氏は、メール等は問題ないものの、CoursePowerなどのLMSや、Zoom等のWeb会議ツールの使用経験がなかった。

さらに、未修かつ独自の文字を学ぶ韓国語教育ならではの問題も浮上した。これは初めてハングル文字を学ぶ学生にとって、Web上で文字の入力することが非常に難しいということである。すなわち、ハングル文字の入力は、ちょうど日本の「かな入力」のような独自のキー配列があり、日本語のアルファベット入力に該当する方法がほぼ使われていない。

そうすると、たとえば授業でハングル文字の書き取りや作文の授業を行い、課題を提出させる際にLMSの課題提出機能を使おうとしても、受講生は直接入力ができず使用できないことになる。

3.3 コーディネータの対応と授業運営

上述のような状況を踏まえ、非常勤講師と密接に協議しつつ、早急に授業スタイルを確定・実施することが必要になった。2020年度春学期はコーディネータ自身の能力も勘案し、非常勤講師の過剰な負担とならぬよう、なるべく「ローテク」かつ容易な手法で、授業を実施することとした。

偶然春学期にはコーディネータの韓国語の授業が無かったことから、もっぱら非常勤講師のフォローを行うこととした。またコーディネータは、遠隔教育について経験が不足していたため、学部で行われた授業講習会に積極的に参加し、各種の遠隔教育手法について講習を受けるとともに、遠隔教育に関する様々な情報収集を行うように努めた。

3.4 授業科目ごとの対応

3.4.1 韓国語入門Ⅰ・Ⅱ

全学共通教育科目「韓国語入門Ⅰ・Ⅱ」については、担当の非常勤講師 B 氏とのメールによる打合せの結果、教科書を使用する学習指示を作成し、毎回メール配信する方法を取った。これは主として教科書を用いた自習を指示するとともに、教科書内の練習問題に回答する課題を課し、これを提出させて出席と評価に用いた。

図3は、その際に配信した学習指示書のモデルの一部である。遠隔授業に関する説明の後に、教科書を用いた自習の指示があり、中には韓国アニメ番組のオープニング動画サイトのリンクがあり、「この韓国語アニメの邦題は何か」など、教科書を離れた課題も出し、自習が単調にならぬようバラエティを持たせている。

授業開始後、全学共通授業のため受講生が「後回し」にしたためか、クラスによっては授業開始直後に一時的に6割の学生から反応がなく、対応を迫られた。幸いB講師が自身のメールアドレスから受講生に直接連

絡を行った結果、次第に受講生から連絡が来るようになり、何とか春学期を終えることができた。

非常勤講師の場合、複数の他大学等で授業担当のあるケースも多く、その場合、大学ごとに異なる事情に苦勞することも多いようである。そのため基本的には講師側の希望を尊重する姿勢も必要であり、一方的にコーディネータが要望を通せない部分もある。本学で推奨のあった「一部オンライン」等、非常勤に頼みやすい「軽めの」遠隔授業方法の検討も必要であるだろう。

【授業説明・学習指示】
2020.05.■

韓国語入門Ⅰ（第2回）

受講生の皆さん、こんにちは。担当者の■■です。
 今日から韓国語特有のハングル文字の学習に移ります。この授業は韓国語が「ゼロ」状態の受講生に韓国語の初歩を教えることを想定しています。ですので、前半部分はハングル文字の読み書き、後半部分は韓国語文法の「基礎の基礎」を学習する予定です。
 ハングル文字は、前回の授業で見たように、母音と子音の「パーツ」を組み合わせてできる「表音文字」ですので、一つ一つのパーツを覚え、読み書きができることが必要とされます。一気にすべて覚えられれば理想的ですが、ゼロから始める人は見たことのない文字ですし、忘れたり間違ったりすることも多いと思います。焦らずに、少しずつ学習を進めましょう。
 今回はハングル文字のパーツのうち、母音の基礎について学びましょう。□□□に開かれた内容が、皆さんに対する学習の指示なので、それに沿って学習を進めてください。今日用いるのは①授業説明・学習指示（この文書）、②教科書『パランセ韓国語』、③教科書付属のCDの3点です。

①教科書のp.8を読んで、8つの基本的な母音のパーツを覚えましょう。これらの母音のパーツは、日本語の五十音で言えば「あ、い、う、え、お」に該当します。ただ「え」に2つ、「お」に2つあると思ってください。

②教科書のp.9を読んで、「なぞりましょう」と練習1-1をやってみてください。正解は次回送ります。

③下のリンクは韓国のアニメ動画です。このアニメの日本でのタイトルは何でしょうか？また、主題歌には4つの韓国語の挨拶が歌われています。聞き取れるものがあれば応えてください。Course Powerの「テスト」に回答してください。
<https://www.>

④教科書のp.10を読んで、6つの基本的な母音のパーツを覚えましょう。これらの母音のパーツは、日本語の五十音で言えば「や、ゆ、いえ、よ」に該当します。ただ「いえ」に2つ、「よ」に2つあると思ってください。

⑤教科書のp.10~11を読んで、「なぞりましょう」と練習1-2と1-4をやってみてください

図3 韓国語入門Ⅰ・学習指示書モデル

3.4.2 韓国語Ⅰ・Ⅱ

他方、国際関係学部専門の韓国語Ⅰ・Ⅱについては、A氏とも繰り返し電話連絡にて打合せを行った。その結果受講生に上記の韓国語入門Ⅰ・Ⅱのような教科書を用いた学習指示書をメールにて送付しつつ、Google Classroom中のMeetを用いてのオンライン授業を行うやや変則的な授業形態に落ち着いた。

これは、国際関係学部の遠隔授業講習会で、ある大学の未修外国語の遠隔教育についての情報を得て、これを応用したものである。その大学では未修外国語について専任教員が遠隔授業や課題配信を行い、ネイティブスピーカーの非常勤講師は受講生の発音のチェックをするというように、いち早く分業をする体制を取ったというものであった。

また当時参考とした名古屋大学教養教育院ウェブサイトの教員向けの遠隔授業情報に、教員側からの様々な遠隔教育の難易度が示されていた。それによると、遠隔教育に不慣れな講師がいた場合、対面授業と同様のことをする、授業録画の配信やオンライン授業のほうが課題配信やオンデマンド型の授業よりも容易であるとのことだった。

これらの情報を参考としながら、教科書を用いた学習指示書のメール配信とそれによる課題提出に加え、韓国語の母語話者であるA氏によるオンライン会話レッスンを30分程度行った。

このオンライン会話レッスンについては、A氏が自宅でのオンライン授業実施が困難であるということだったので、大学に来校してもらった。コーディネータは、教室とコンピュータを準備するとともに、A氏が授業する際には同じ教室にスタンバイした状態でGoogle Meetにて実施した。

これはA氏が大学近辺に居住し自家用車で大学に直接来ることが容易であったために、偶然可能であったかもしれない。なお授業は5月下旬から上記レッスンを実施し始めた。ネット接続の問題がある受講生も複数いたため、当初は希望者のみが参加する「インセンティブ課題」として会話レッスンを行った。この状態でも、半数を超える受講生が参加した。またベテランで対面授業のスキルの高いA氏の能力はオンラインでも遺憾なく発揮され、受講生側も教員側も満足した授業となったようであった。

コーディネータも非常勤講師もオンライン授業が初めてであったことから、音声の問題やネット接続の問題など、よくある試行錯誤を繰り返しつつも母語話者であるA氏という「資源」を活かした「一部オンライン」の授業が行えるようになった。

3.5 小結

以上、2020年度春の韓国語授業の遠隔授業への対応を見てきたが、コーディネータを含む担当者全員に遠隔授業の経験・知識が無いという非常に危うい状況のもと、何とか授業を成立させたという状況であった。やはりメールによる課題配信には限界があることも実感できた反面、受講生がZoomなどで90分間フルに授業を視聴できているのかというような議論もあった。

非常勤講師に頼りがちな大学の未修外国語の授業においては、やはりなるべくシンプルな手法の遠隔授業の選択肢を準備する必要があることも感得した。特に未修外国語では、遠隔授業経験の少ない教員向けに、学内に簡易な共用のオンライン講義施設があっても良いのかもしれない。

4 まとめ

ここまで、中国語と韓国語科目を事例として、2020年度春学期の未修外国語の遠隔教育への対応について述べてきた。言うまでもなくコロナ禍によって、多くの科目において急速遠隔教育を行うことになり、どの担当者にもそれなりの苦労があったと思われる。

本稿で扱った未修外国語のケースについても、コーディネータが苦勞をただけではなく、本学の教育を支えている非常勤講師も同様であり、その時点で遠隔教育に習熟しておらずともいたし方ないと考えべきで、所与の条件をいかに把握して対応したのかが重要であるだろう。またコーディネータとしては、「緊急事態」の中で、授業を成立させることが最も重要であるという認識であった。

中国語については、新入生指定履修科目の見直しに伴い一部科目の履修時期を変更する対応を取るとともに、科目担当者の情報共有と不安や疑問解消のために打合せ会を実施した。また、学部教育科目の中国語科目に関する科目担当者への聞き取りをもとに、クラス規模、遠隔授業での工夫や問題点をまとめている。

一方韓国語は、科目コーディネータが科目担当者の要望や可能な授業方法を把握し、それに合わせて比較的容易な課題配信を中心に遠隔授業を行った。一部の科目は韓国語を母語とする講師によるオンライン授業を交えた形態へと移行した。

今回の経験を通じて感得されたのは、まず授業運営の一定程度を非常勤講師に依存している以上、彼らにも導入しやすい遠隔授業ツールを使用する方が良いのではないかということである。その際には、ITスキルの高くない教員や非常勤講師も取りこぼさない授業運営システムを心がける必要がある。また、今回の経験から、2020年度春学期のような状況下では、まずは授業を成立させることを最重要視すべきであると考えられる。教授者、受講者双方にとって、「敷居の低い」デジタル化から段階的に進めていくべきであると実感した。

次にコラボレーションツールについて言えば、CoursePowerなどは、導入から時間をかけて本学に個別化最適化を進めてきたのは重々承知しているが、Microsoft TeamsやGoogle Suite for Educationのようなよりメジャーなツールを導入することで、非常勤講師への導入もハードルが下がるのではないかな。

また、中国語科目と韓国語科目の状況を対比すると、本学の中国語教育は、科目数でも、教育にかかわる講師の数でも、韓国語よりも圧倒的に規模が大きいことが見て取れ、それが遠隔教育への対応にも影響があるように思われる。特に中国語の打合せ会が非常に早い時期に実施できたことは、平素からコーディネータを

中心に多数の教員が緊密な連携を取っている証左といえる。また専任教員が複数いることも良い方向に働いていたように思われる。

他方、両言語とも「緊急事態」に対応する過程で、否応なしに様々な局面に遭遇したことから、コーディネータや担当者は、それなりの経験を積み、一つ上のレベルに到達できたようにも感じられる。これを契機にコロナ後の「新常态（ニューノーマル）」を意識し、遠隔・対面両方に対応可能な教材作り、授業運営を検討すべきであるだろう。

謝辞

本研究は、2020年度中部大学特別研究費C P「未修外国語科目の遠隔教育に関する研究：中国語・韓国語を中心に」の支援を受けて行われた。

参考文献

- 『10日間のハングル：気になるコトバのいちばんやさしい入門書』、1984、JICC出版
- 中山紀子・大澤肇「コロナ禍下の文系学部による遠隔授業講習会－国際関係学部2020年春学期奮闘記－」、2020、中部大学教育研究20、pp.79-91

Remote Education of Unlearned Foreign Language Subjects in the Spring Semester of 2020: Focusing on Chinese and Korean

SHIBUYA Shizuaki^{*1} and WADA Tomohisa^{*2}

*1 Professor, Department of International Studies, College of International Studies, Chubu University

*2 Associate Professor, Department of International Studies, College of International Studies, Chubu University

Abstract

This paper examines and considers how remote education was conducted in unlearned foreign language subjects in the spring semester of 2020. As the authors are Chinese and Korean subjects coordinators, we will discuss the situation of these subjects. For Chinese courses, the curriculum was adjusted for temporary changes in designated courses for new students. The coordinator also held a meeting to share information and resolve questions. Additionally, based on interviews with Chinese teachers, ideas and problems in remote lessons were summarized. Conversely, for Korean, the subject coordinator solicited the instructor's request and possible lesson methods. Accordingly remote lessons were conducted using a relatively easy method of task distribution. Some subjects have shifted to partial online lessons with native speakers.

Key words

Unlearned Foreign Language, Chinese, Korean, Foreign language education, Remote Education